地方低ランク高校において孤立化する生徒の現状と支援の課題

――高知県における３年間のパネル調査の結果から――

古　賀　正　義

１．高校生への継続調査からみた「地方若者論」再考

近年若者の「生きづらさ」が繰り返し論じられてきた。地域社会に自分の居場所がみつからず，将来展望が描けない疎外状態が語られ，引きこもりの長期化・高年齢化を代表例として，「コミュ障」や耐性力不足など本人の心理的歪みに関わる原因論が繰り返し語られてきた（古賀・石川，2018）。従来若者は，家庭だけでなく学校や職場，地域サークルなど多様な社会関係によって自己のアイデンティティを構築していくと考えられた。だが，筆者も参加した東京都『高校中退者追跡調査』などの結果によれば，家庭の協力・援助が乏しく，友人と助け合う関係もなく，信頼できる他者がいないなど，若者の多くに「孤立」の実態が浮かび上がってきた（古賀2016a）。結果，困難を抱える若者ほど，家族など限られた他者（コアな他者）に依存した社会生活となりやすいといえた。

『孤独なボーリング』で知られるパットナム（2006）の地域コミュニティの議論を参照すれば，「結束型」の閉じた対人関係が強まるのに反して，「橋渡し型」の広がりのある緩やかな社会関係が乏しくなるという。それによって，「社会関係資本」（身近な他者からの情報や援助）の獲得が困難になっていく。すなわち，困難を抱えた若者個人の力ではなく，社会関係

のネットワークの変質が，若者の行動特性や将来生活を変えてしまうといわれる。

本稿では，一次産業中心の伝統的産業構造に依拠する高知県で行った低ランク高校生への 3 年間にわたる継続調査の結果を報告したい。東京で行った同種のパネル調査のフォーマット（古賀 2016b）を踏襲しつつ，「地方の若者」についてネットワーク論の視点から高校生活の実際とその社会生活や家庭生活への影響，将来展望の特徴を検証してみようとした調査である。

すでに地方地域社会の影響については数多くの研究が報告されており，「マイルドヤンキー」など非エリート層の地元つながりの強まりや，限定された就労先による高校の地域人材づくりの困難さ，あるいは経済的な貧窮からの逸脱集団（オレオレ詐欺など）への参入の容易さなども指摘されてきた（『教育社会学研究』102 集など参照）。

しかしながら，筆者が参画した内閣府『子供若者の意識に関する調査報告書』（古賀 2017）では，大都市と地方との若者のネットワーク形成や居場所認識の差異は明瞭でなかった。スマホなどによる情報消費の時代に，「地方だから」地域共同体が存続し生徒の社会生活を豊かにしているという見方は一面的にすぎる。

これら知見を念頭に，地方低ランク高校の疎外される生徒層に焦点化し，担当教師やスクールソーシャルワーカーらのエピソードも交えつつ，量的質的調査の両面から，地方高校生の社会的ネットワークの実態を簡潔に分析してみたい。

2．パネル型アンケート調査と分析の方法

県立の全日制専門高校（普通科・職業科併設 1 校，職業科 2 校）に，3 年間の継続したパネル調査を依頼した。本稿では，A，B，C 高校と称する。調査対象校の学年あたり生徒数は，A 高校約 120 名，B 高校約 210 名，C

高校約 120 名であり，転退学などによって 3 年間の調査継続ができなかった生徒は全体で 1 割弱（約 40 名）であった。県内予備校の調べによる受験偏差値は，各校とも 40 前後だった。

調査の実施スケジュールは，次のとおりである。第 1 回は 2016 年夏（1 年生），第 2 回は 2017 年冬（1 年生），第 3 回は 2017 年秋（2 年生），第 4 回は 2018 年夏（3 年生），第 5 回が 2019 年冬（3 年生）。

本稿では，対人関係を支える資源に着目して分析を試みる。この調査と同種の東京でのデータを分析した筆者の知見（2019）では，第 1 回と第 5 回の調査結果を比較した結果，友人や家族など日々接触する対人関係が変化しないままの固定層と変化する流動層が相半ばしていることがわかった。生徒が認識する対人関係のあり方は思いのほか流動的で，高校在籍 3 年間にわたって変化し続けていることが指摘される。

東京都調査の指摘をもとに，共同研究者の香川大学・西本（子ども社会学会オンデマンド発表，2021）がデータ整理を担当し，本稿では 4 つの層を設定してみた。図表 1 は，設定した 4 つの層の詳細を示したものである。「あなたは悩みごとがあるとき，どのような人に相談しますか。次のうち，あてはまる番号に全て〇をつけてください。」という設問に対して，2 種

図表 1　層の設定

		実数	%
孤立層	第 1 回（1 年生夏）の相談相手が 1 種類以下 第 5 回（3 年生冬）の相談相手が 1 種類以下	132	28.2
拡大層	第 1 回（1 年生夏）の相談相手が 1 種類以下 第 5 回（3 年生冬）の相談相手が 2 種類以上	70	15.0
縮小層	第 1 回（1 年生夏）の相談相手が 2 種類以上 第 5 回（3 年生冬）の相談相手が 1 種類以下	80	17.1
保有層	第 1 回（1 年生夏）の相談相手が 2 種類以上 第 5 回（3 年生冬）の相談相手が 2 種類以上	186	39.7
合　計		468	100.0

類以上の他者を選択したか否かを設定の基準とした。

選択肢には，父親，母親，きょうだい（兄弟・姉妹），その他親族（祖父母・おじ・おば・いとこなど），学校の友人（小中学校時代も含む），学校の先輩（小中学校時代も含む），学校以外で知り合った友人・先輩，彼氏・彼女，高校の先生，小・中学校時代の先生，学校の保健室の先生やカウンセラー，アルバイト先・仕事先の人，インターネット上での知り合い，その他，という 14 種類の他者があがっている。

設定したのは，「孤立層」「拡大層」「縮小層」「保有層」の 4 つである。「孤立層」は，第 1 回＝ 1 年生時，第 5 回＝ 3 年生時の相談相手がともに 1 種類以下の者である。「拡大層」は，第 1 回の相談相手は 1 種類以下だったが，第 5 回の相談相手が 2 種類以上になった者である。「縮小層」は，第 1 回の相談相手は 2 種類以上だったが，第 5 回の相談相手が 1 種類以下になった者である。「保有層」は，第 1 回，第 5 回の相談相手がともに 2 種類以上の者である。

4 つの層に分けた場合，最も該当者が多いのは「保有層」の 39.7%，次いで「孤立層」の 28.2%となっていた。すなわち，第 1 回と第 5 回の相談相手がともに 1 種類以下という「孤立層」の生徒が，約 3 割にのぼることが確認できる。ちなみに，「拡大層」「縮小層」という相談相手の数に増減の変化があった層は，2 割弱程度にとどまっていた。

では，「孤立層」の相談相手は，第 1 回と第 5 回でどのように変化したのか。図表 2 は，「孤立層」の相談相手の変化を示したものである。この結果からは，主な相談相手は，「学校の友人」であり，その値が，第 1 回の 41.7%から，第 5 回の 31.1%へと減少していることが確認できる。

また，意外にも，家族を相談相手として選択する者が少ないことも指摘できる。図表には掲載していないが，比較対象として，被調査者全体の相談相手の値をみてみると，「父親」21.0%，「母親」45.3%，「きょうだい」

図表 2 【孤立層】の相談相手の変化

	1 回目選択（%）	5 回目選択（%）	1 回目−5 回目
1 父親	0.8	0.8	0.0
2 母親	9.1	6.1	3.0
3 きょうだい	0.0	1.5	-1.5
4 その他親族	2.3	0.0	2.3
5 学校の友人	41.7	31.1	10.6
6 学校の先輩	0.0	0.0	0.0
7 学校以外で知り合った友人・先輩	0.0	0.0	0.0
8 彼氏・彼女	1.5	0.8	0.7
9 高校の先生	0.8	0.0	0.8
10 小・中学校時代の先生	0.8	0.0	0.8
11 学校の保健室の先生やカウンセラー	0.0	0.0	0.0
12 アルバイト先・仕事先の人	0.0	0.8	-0.8
13 インターネット上での知り合い	0.8	1.5	-0.7
14 その他	2.3	0.8	1.5

20.1%となっており，「学校の友人」57.8%に次ぐ値となっていることがわかる。しかし，「孤立層」に限定した場合，「父親」「母親」「きょうだい」の値はいずれも 10%に達していない。相談相手として家族を選択できず，学校の友人を頼りにせざるを得ない状況，それでありながら，当初の友人すらも高校在籍中に相談相手ではなくなっていく変化がうかがえる。

以下では，「孤立層」にのみ着目し，家族との関係，友人との関係，中学時代の経験，高校生活の評価，自己評価との関係などを検討する。

3．「孤立層」の家族との関係，友人との関係

まず，家族との関係をみたい。図表 3 は，家族との関係を聞いた各項目について，該当者（4 件法で，「とてもあてはまる」もしくは「まああてはまる」と回答した者。以下同様。）の割合を示したものである。

図表 3　家族との関係

（%）

		孤立層	拡大層	縮小層	保有層	
家にいると気が休まる	第 1 回	75.6	85.7	88.6	92.8	**
	第 5 回	86.8	89.9	86.0	96.7	*
家族は自分のことをよく理解している	第 1 回	59.3	72.5	79.7	88.3	***
	第 5 回	59.6	75.4	73.7	89.7	***
家族と囲む食卓は楽しい	第 1 回	57.7	80.0	73.4	86.7	***
	第 5 回	64.0	73.9	77.2	90.2	***
父親と自分の考え方は似ている	第 1 回	33.3	53.6	50.0	52.0	**
	第 5 回	38.9	53.6	50.9	58.0	**
母親と自分の考え方は似ている	第 1 回	37.7	55.7	57.7	66.7	***
	第 5 回	44.2	56.5	54.4	70.5	***

注：*p ＜ .05，**p ＜ .01，***p ＜ .001。以下，図表では同様に表記。

この結果からは，いずれの項目についても，他の層と比べて「孤立層」の値が低いことが確認できる。具体的にいえば，「父親と自分の考え方は似ている」「母親と自分の考え方は似ている」という 2 項目についていえば，1 回目から 5 回目へと数ポイント増加しているものの，5 回目で比較すると，「保有層」からみれば，20 ポイントほどあるいはそれ以上の低い値である。

同様に，「孤立層」では家族との一体感を示す「家族は自分のことをよく理解している」「家族と囲む食卓は楽しい」が，5 回目調査時で，6 割前後であるのに比して，「保有層」では 9 割前後と圧倒的なポイントの差が散見される。家族との一体感を感じ家族に頼れる気分は，図表 2 の相談相手の選択に続き，みいだしにくい結果といえる。

友人関係についてもみてみよう。図表 4 は，友人関係に関する各項目について，該当者の割合を示したものである。この結果からは，「孤立層」の友人関係の特徴が読み取れる。「孤立層」は，他の層と比較して，「友人関係はあっさりしていて，お互いに深入りしない」（5 回目調査で「孤立層」68.1％＞「保有層」61.3％），さらに「友人といるより 1 人でいる方が落ち

図表４　友人関係

（%）

		孤立層	拡大層	縮小層	保有層	
友人関係はあっさりしていて，お互いに深入りしない	第１回	58.8	51.4	38.0	51.6	*
	第５回	68.1	60.0	63.2	61.3	
自分の意見が周りと違っていても積極的に主張できる	第１回	58.0	66.7	70.9	68.3	*
	第５回	58.1	61.4	70.2	70.3	
友人といるより１人でいる方が落ち着く	第１回	53.8	44.9	35.0	31.9	**
	第５回	67.0	58.6	66.7	42.4	
少数の友人より多方面の友人と色々交流する方だ	第１回	35.9	36.2	44.3	51.4	
	第５回	40.2	42.9	43.9	49.2	
誰とでもすぐ仲良くなれる	第１回	49.6	62.9	67.1	69.9	*
	第５回	51.3	61.4	59.6	68.6	*

着く」（同様に，「孤立層」67.0%＞「保有層」42.4%）の値が非常に高い。

反対に，「自分の意見が周りと違っていても積極的に主張できる」（同様に，「孤立層」58.1%＜「保有層」70.3%）。さらに「誰とでもすぐ仲良くなれる」（同様に，「孤立層」51.3%＜「保有層」68.6%）の値も低い。つまり，回答結果からみれば，「孤立層」は，基本的に１人でいることを好み，仮に友人を持つにしても，狭い交友範囲内でのあっさりとした深入りしない関係を好んでいる様子がうかがえる。

家族と友人という最もコアな人間関係の深まりや安定感のなさは，孤立層に相談できる相手を見失わせる結果を招いているようにみえ，かつ，高校３年間でその孤立傾向が改善できないことの問題性があるといえる。

４．中学時代の経験や高校生活の評価

では，対人関係を豊かにする大きな源泉といえる学校生活の状況は各層でどうであったのだろうか。まず過去を振り返って，中学時代の学校経験はどうかみてみよう。

図表5は，中学3年時の出席状況を示したものであり，また，図表6は，中学卒業時の学業成績の自己評価を示したものである。まずもって結論からいえば，この結果からは4つの層の間で大きな違いはうかがえない。

確かに，「孤立層」は「一日も休まなかった」者の割合が21.8％で，「保有層」の24.9％よりは低いが，ほとんど差がないといえる。他方で，成績評価については，「孤立層」が「下の方」が24.4％と比較的多くなっているが，とびぬけて高い値とはいえず，「保有層」の10.2％よりはかなり高い値とみて取れる。よくいわれるような中学時代の不登校や学業不振が高校での対人関係や学業への意欲に影響を及ぼすことは，そもそも低ランク高校生徒への調査であるこのデータからははっきりと読み取れないのである。いいかえれば，「孤立層」だけが中学校時代の問題を抱えていたとはいいきれない。

ならば，入学後の高校生活はどうだったのだろうか。図表7は，学校生活に関する各項目について，該当者の割合を示したものである。この結果からは，ほとんどの項目について，他の層と比べて「孤立層」の値が低いことが確認できる。

具体的にみれば，「孤立層」は，学校への適応感が低く，学年が進んでもその感覚が変化しにくい。「学校は過ごしやすいところだと感じる」の

図表5　中学校3年時の出席状況

（％）

	一日も休まなかった	少し休んだ	半分くらい休んだ	ほとんど休んだ	合計	合計（実数）
孤立層	21.8	70.6	5.9	1.7	100.0	119
拡大層	32.3	63.1	4.6	0.0	100.0	65
縮小層	26.7	65.3	6.7	1.3	100.0	75
保有層	24.9	71.6	3.0	0.6	100.0	169
合計	25.5	68.9	4.7	0.9	100.0	428

図表 6　中学卒業の頃の成績（学年での成績）

（%）

	上の方	やや上	真ん中	やや下	下の方	合計	合計（実数）	
孤立層	0.0	7.6	33.6	34.5	24.4	100.0	119	*
拡大層	1.7	20.0	35.0	33.3	10.0	100.0	60	
縮小層	0.0	13.0	39.1	30.4	17.4	100.0	69	
保有層	0.6	11.4	44.3	33.5	10.2	100.0	167	
合計	0.5	11.8	39.0	33.3	15.4	100.0	415	

図表 7　学校生活の評価

（%）

		孤立層	拡大層	縮小層	保有層	
学校は過ごしやすいところだと感じる	第 1 回	75.8	90.0	81.3	91.4	***
	第 5 回	71.8	85.7	82.5	84.9	**
信頼できる先生がいる	第 1 回	40.2	60.9	62.3	69.9	***
	第 5 回	58.6	68.6	68.4	76.9	*
先生の言うことをよく守っている	第 1 回	79.5	88.6	80.0	91.8	
	第 5 回	76.1	81.4	73.7	78.9	
自分の好きなことを学ぶことができる	第 1 回	69.7	80.0	86.3	93.0	***
	第 5 回	58.1	77.1	68.4	75.8	**
将来の希望に近づいていると感じる	第 1 回	50.8	67.1	66.3	77.4	***
	第 5 回	59.8	75.7	66.7	72.6	*

回答では，「孤立層」が第 1 回から第 5 回調査では 75.8％から 71.8％へとほぼ変わらず，高校の居心地を低めに評価している。これに比して，「保有層」では 91.4％から 84.9％へと居心地評価が 3 年間で悪くなっていっても，最後まで高い水準を保っている。ここでは，在学時のよい居心地がしだいに失われていく傾向にありながらも，高率で，生活の居場所を支持する好評価は保たれている。「先生の言うことをよく守っている」という項目でも同様な傾向がみられ，「保有層」は「孤立層」に比して，5 回目調査に向

かって，割合を減少させながらも，78.9％＞76.1％と高水準を保っている。

これに比して，「信頼できる先生がいる」の回答では，「孤立層」の該当者は，第1回調査の40.2％から第5回調査の58.6％へと増加していく。しかし，他の層と比べると値は低く，「保有層」の69.9％→76.9％という増加の傾向には及ばない。結局，家族や友人がそうであったように，教師に対しても相対的には頼ることがない傾向がみて取れる。

さらに，学校教育の将来にわたる効用といった点についても，例えば，「将来の希望に近づいていると感じる」では，「孤立層」の該当者は，第1回調査の50.8％から第5回調査の59.8％へとしだいに増加している。しかし，他の層と比べると値は低く，「保有層」の77.4％→72.6％という横ばい傾向に及ばない。対人関係における援助的な要素の不足は，高校生活の評価をしだいに向上させながらも，入学時からの関係性を補完しきるところにまでは至っていないのであって，初年次段階からの関係性改善への個別適合的な支援が待たれる結果となっている。

5．自己評価の低さと将来展望の見えにくさ

最後に自己評価の結果を確認し，自己肯定感の生成にかかわる将来像にも目を向けたい。図表8は，自己評価を聞いた各項目について，該当者の割合を示したものである。この結果からは，いずれの項目についても，他の層と比べて「孤立層」の値が5回目調査時でも低いことが確認できる。

例えば，「自分には自分らしさというものがあると思う」では，1回目から5回目で割合（71.0％→70.9％）が変化せず，「保有層」の91.4％→89.2％という高い水準の自己評価の持続には全く及ばない。同様に，「今の自分が好きだ」といった項目でも，5回目調査時の44.0％と比べて，「保有層」の60.3％という高率の自己評価結果には及ばない。ここからは，他者との関係性や信頼感の存続が自己理解や評価を向上させる要因になって

図表 8　自己評価

（%）

		孤立層	拡大層	縮小層	保有層	
自分には自分らしさというものがあると思う	第 1 回	71.0	85.7	88.8	91.4	***
	第 5 回	70.9	91.3	82.5	89.2	***
どんな場面でも自分らしさを貫くことが大切だ	第 1 回	65.9	80.0	77.5	82.8	
	第 5 回	68.4	82.9	73.7	81.6	*
なりたい自分になるために日々努力している	第 1 回	53.8	64.3	71.3	75.8	**
	第 5 回	57.3	75.7	75.0	73.0	*
今の自分が好きだ	第 1 回	34.1	42.9	40.0	52.7	*
	第 5 回	44.0	50.0	50.9	60.3	*
努力すれば希望する職業につくことができる	第 1 回	78.0	88.6	96.2	93.5	***
	第 5 回	76.9	87.1	87.7	92.4	**

いることが読み取れる。

「なりたい自分になるために日々努力している」「努力すれば希望する職業につくことができる」といった将来展望に関する項目の値についても同じような回答の特徴があり，「孤立層」は評価の値が低い。つまり，自己評価が低く，将来展望も持ちづらいといえる。具体的には，「なりたい自分になるために，日々努力している」の回答では，5 回目調査時で，「孤立層」57.3％＜「保有層」73.0％と大きなポイントの差が認められる。他者に頼るところの少ない高校生活の状況が，「孤立層」の回答から垣間見える結果といえよう。

6．パネル調査のまとめからみた「孤立層」

以上の結果について，パネル調査の結果の要点を整理すると，次の 3 点にまとめられる。

① 第 1 回と第 5 回の相談相手がともに 1 種類以下という社会関係の広がらない「孤立層」の生徒が，全体の約 30％という大きな比率にの

ぼっている。

② 「孤立層」の主な相談相手は，学校の友人に限定されやすく，家族を選択する者は10％にも満たない。

③ 「孤立層」は，家族に頼りづらいばかりでなく，学校生活への適応感が低く，友人と過ごすよりも1人でいることを好み，自己評価も低くなる傾向にある。

以上のように，同じような低ランクの高校に在籍していても，全体の3人に1人ほどを占める対人関係の豊かさを欠く「孤立層」の生徒が，現在置かれている厳しい社会・学校環境の実際が明らかになった。家族，友人関係，高校生活において，こうした生徒にとって頼れる他者の存在や自分を受け止めてくれる居場所はみとめられにくく，その結果，自分自身の存在を肯定できる，自己有用感を感じるとは言い難くなっている。

これら生徒像は，インタビュー調査の質的な結果からもフォローできるのか。聞き取り調査事例から確認したい。

7．インタビュー調査からみた対人関係のネットワーク

最後に生徒の言葉にも耳を傾けてみたい。低ランク高校（商業高校）の「孤立層」とみられる男子生徒の語りを紹介し，同様に，「孤立層」の生徒にたいする教師の問題意識も紹介しておく。ここで取り上げる事例は，中学時代まで学習の遅れが顕著であった「孤立層」の生徒が，高校生活で新たに感じ取ったものや将来の見方の変化がどのようにあったかを語っているものである。この語りを踏まえて，教師が生徒指導において孤立しがちな生徒への接し方をどのように考え説明しているかをあわせて読んでほしい。

インタビュー1：生徒B君の語り

中学校のときはやっぱり，部活もあったし，まあ，中学校のときか

らそういう欠席とか，遅刻とか，多かったんですけど。あんまり言われなかったんですよね，先生からは。でも，高校3年生の1学期になって，（卒業できないかもしれないと）ちょっと痛感して。自分のいけないところではあるのですけど。

インタビュア：それ，何で単位を落としてしまったの，ちなみに？

授業日数が足りなかったので。遅刻と欠席が続いていて。あと1回出たら大丈夫だったのを，落としたりとかしていたので。ちょっと，ほんとうに惜しいことをしたなって，（いまになると）思ってます。

インタビュア：君がするのって，どんなことを友達に相談するの？

僕は（進路の選択で）妥協して専門学校に行こうかなと思って。でも，やっぱり4年制大学に（本当は）行きたかったから，1浪してでも行ったほうがいいかなって言ったら，友達からは，それなりの決心じゃないですけど，「やっぱり覚悟がないと，やっていけんかもしれんでって」言われて。いや，ごもっともだなと。

……不安は，やっぱり，今まで自分が楽なほうに逃げてきたので，そのツケが後で全部回ってくるのがすごく怖いですし，でも，そうですね，ちょっと気が（ついた）。

……でも，それはもう，自分がやってきたことなので，それはもう受け入れるのと，後はちょっと，人生をちょっと逆転じゃないですけど，タレントではないですけど，そんなモデルとか，そういうテレビとかの業界でいう，「人生逆転したいなって」。はい。（学校時代と）逆転して，最後はやっぱり安定した家庭を持ちたいですね。

B 君の語りには，中学時代から始まる遅刻や欠席による，自分の努力不足を認めつつも，相談できる他者が少なく，よりよい選択ができてこなかったことが語られる。しかし，選択してきた結果を認めて大事にしていくしかないという決意の様子もうかがえる。そして，最後にあるように，失ってきた家庭の安定や豊かさを求める気分を語っているのが，孤立層の多くの生徒に共通する幸せな将来像である。

そうであるならば，教師は孤立層にかかわる生徒の社会関係の欠落をいかに見ているのか。以下でみてみよう。

インタビュー 2：A 校進路指導教師の語り

一応ですね，ロングホームとか，あとキャリアの授業の中で，「ようこそ先輩」という形で，卒業生の職業のこんな仕事がありますよとか，この仕事につくためにはこういう道を進まないとなれませんよ，みたいな，そういうキャリアガイダンス的なことを，生徒に話しています。

……非常に（早くの時期）からで，でも結局，彼らが最後のときに決めるのが，あまりそういうしんどくない科目のあるコースに，目的を持たず行ってしまうところがあります。

……あと，どうしてもコミュニケーションの問題で「障害」といいますか，（コミュニケーションの）苦手な生徒は，人間関係で，自分はこの道に行きたいんだけれども，（相談できる）友達がいないからやっていけないという形で，もう友達のいる（進路の）方へ行ってしまうということがあります。

……いかに卒業へ，そして友達と何とか楽しくという形が見えます。あと，実際卒業のときになって，ほんとに進路を決めるときに，大きく抱えているのが経済的な問題です。多分どの子も，心の中で，親の

経済的なことを考えていると思います。

……ほんとに私たちが，もったいないという思い，もっと夢をかなえるために一番遠回りのようで近道なのは大学に行くほうがいいんじゃないかという思いもあっても，（本人の）ずっと（進学の）意思はかたかったんですけど，でもだめで。だめもとで，（進学先に）連れていったら，本人が思いの外，学んでみたいということでしたので。（コミュニケーションの乏しい）保護者に中間明けの面談にもう来ていただいて（説得したりしています）。

この教師の語りには，指導の限界があり，生徒の学力等の実態もさることながら，不安定な家庭の親の理解も引き出しつつ，将来に関わる進路指導の成果を高めることの難しさが語られている。生徒と保護者との関係性が充分でなく，生徒の希望に理解をえることから始める必要があると語られる。孤立する生徒たちの将来を展望することは，事のほか難しいという。

8．結論と課題

近年，就労・就学の機会をはく奪され，孤立する若者の存在が問題視されてきた。本調査の結果からみれば，学校を起点とした社会関係に依拠しながら生活する地方地域の低ランク高校生徒の実情は，大都市とは異なりながらも，一層厳しい教育・就労環境にあることがみて取れる。

地方低ランク高校の家庭は十分な居場所や援助資源の提供などを行えていないが，そうでありながら，経済的な地域事情があって，家庭をベースとした，自宅の近場の地域を優先した進路の選択に向かうしかないという実情もある。同様に，話せる友人が少ない中で，限られた友人に頼り，安易に進路を転換する場合もあるといえる。

本調査研究から解釈できることは，仮に孤立しやすい生徒に努力不足や

場への適応の課題があるとしても，進路を形成するための継続的な資源，とりわけ，社会関係・対人関係の資源の提供と支援がなければ，進路・将来生活にかかわる選択肢が拡大することは難しいということである。孤立は，将来にわたる生徒のライフスタイルを左右してしまっている。

引き続き，今後もパネル調査の分析を進め，個別な生徒事例の質的な調査結果も含めて，「地方の若者」に付されたステレオタイプな理解と異なり，対人ネットワークに組み込まれず孤立化する若者の実際に経年的に迫りたいと思っている。

追記　本稿は，日本子ども社会学会第 28 回大会（オンライン実施）で，西本佳代と共同で発表した論考に，加筆修正を加えたものである。発表時に，ご質問・ご意見をいただいた皆さんに謝意を表したい。また，共同研究者のデータ整理等の作業や高知県教育委員会高校教育課のみなさんの調査協力にも改めてお礼をいいたい。

参考文献

古賀正義 2016a「高校中退者問題と格差社会」岩波講座・教育第 2 巻『社会の中の教育』岩波書店

古賀正義 2016b「進路未決定高卒者に関する研究―困難地区の進路多様校や特色校での 3 年間のパネル調査を中心に」『教育学論集』（中央大学教育学研究会）第 58 集

古賀正義 2017「偏位する『社会的孤立』」内閣府『子供若者の意識に関する調査報告書』

古賀正義，石川良子編 2018『ひきこもりとその家族の社会学』世界思想社

古賀正義 2019「地方課題集中高校における生徒支援の実際と課題―3 年間にわたるパネル調査の結果から」（日本教育社会学会第 71 回大会報告資料）。

古賀正義，西本佳代 2021「地方低ランク高校における生徒支援の現状と課題（2）―高知県における 3 年間のパネル調査を中心に―」子ども社会学会第 28 回大会抄録集（オンライン実施）

パットナム，R.D.，柴内康文訳 2006『孤独なボーリング―米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房